

宮本英男先生のこと

石 黒 昭 博

宮本英男先生は1956年に同志社大学文学部英文学科を卒業され、1978年に英文学科へ助教授として迎えられました。その間、京都府立園部高等学校の教諭（これは先生の御母校のひとつ園部中学校（旧制）を前身とする新制高等学校の名門校であることは衆知のことです）、京都府教育研究所所員（英語視聴覚教育担当）、京都府立図書館長などを歴任され、その後、滋賀医科大学助教授の任を経て、同志社へ帰られたわけです。1984年より同志社では教授として主として英語教育学関係の科目を担当されました。

宮本先生が英文学科へ来られてから、卒業生の公立中・高等学校採用試験の合格者の数が飛躍的に増大しました。それまで英米文学や英語学を専門とする先生方が、それこそ片手間でやってこられた英語教育学の専門家を英文学科は得たわけです。

御業績としては、数冊の共著書の外に、増進堂刊行の『英語教育現代キーワード事典』の編集代表を勤められました。翻訳書の『バイリンガルメソッド—付日本における実験と実践』はこの分野の研究の嚆矢として高い評価を学会で得ました。また、文部省検定教科書 *Mainstream* の8巻の著者のひとりとして、この英語教育学界でベストセラーとして名高い名著の制作に加わられました。研究論文、研究ノートとしましては、20指に余るものを発表され、その中でも『英語教育展望』、『現代英語教育』の2誌に発表された2つの論文は独創的な卓見を紹介されたものとして学界、関係者の注意を喚起いたしました。

宮本先生のお人柄は「温厚」ということばはこの方のためにあるのではな

いかと思わせるほどの円満ぶりです。先生が学生に向かっても、誰に向かっても大声を出して叱っておられる姿は見たことがありません。評価について不服を唱えて研究室へ押しかけて来た学生にも深更に至るまで諄々と諭され、尚も云いつのる学生に、それでも半歩もゆずらず不合格とされたというエピソードもあります。

スポーツも万能選手で、特に野球とテニスの腕前は現在でも素人離れをしておられます。

先生の去られたあとの英文学科研究室は火の消えたようになるでしょう。大きな deep voice と特徴のある足音が聞こえなくなるのですから。

どうぞ健康に留意され、いつまでも学生の云うように「万年青年」の宮本先生でいて下さい。